

「ゴミに生きる」

中米三カ国からの報告

オンボロバスはガタガタと音を立
てて進んで行く。半開きの窓から空
を見上げる。空一面に黒ゴミをまき
散らしたような光景が近づいてく
る。ニカラグアの首都・マナグアの
中心部からバスでおよそ一時間。目
的地までの乗車時間は、グアテマラ、
エルサルバドル、ニカラグアでもほ
んど変わらない。観光客はもちろ
ん、地元のNGOの人たちでさえ足
を踏み入れない地区に入る。

空にちらばった無数の黒い点は、
風に舞い、輪を描く鳥の姿であるこ
とがはつきりとしてくる。バスの降
車地点になると、緊張が一気に高ま
る。「行くか、戻るか」。ほんの一
瞬、いつも躊躇する。襲われて、カ
メラを奪われるかもしれない。そん
な危険を冒してまで撮る必要性があ
るのか。複雑な思いが頭をよぎる。
一見して外国人だとわかる身な
り。小柄な人が多い中米の人々に比
べ、上背がある私の姿はいやでも目
立つ。こんなところまで何をしに？
そう言いたげな、乗客全員の視線を

背中を受け、バスを降りる。

人目を避け、白い土ぼこりの舞つ
道を少し歩いたところで立ち止ま
る。くるぶしまである厚手の革で覆
われたトレッキングブーツの紐を結
び直し、同時に、ギョツと心も引き
締める。

ここはニカラグアの首都、マナグ
ア湖のほとりに位置する「アカウア
リンカ」。現地の言葉で通称「イン
ディヘナ(先住民族)の足跡」を意
味する地域だ。目の前に広がるのは、
見渡す限りのゴミの海原。どのくら
い広いのか一瞥しただけでは見当も
つかない。ゴミに群がる鳥影と人び
との姿が重なりあっている。

朝早くから夕方まで、多くの人
がゴミ収集車の後を追う生活を続け
ている。収集車からは、次々と大量
のゴミが吐き出される。腐りかけた
果物や野菜くず、鉄筋や半分溶けか
けた大型トラックのタイヤもある。
ひびの入った注射器や透明の液体が
少し残った薬品のびんも見える。ゴ
ミと呼べそうなものは、何から何ま
で、全て交じりあっている。数時間
もこの場所にいれば、目の前の光景
と悪臭で胸が悪くなり、吐き気を催

してくる。その実態は、グアテマラ
でも、エルサルバドルでも、ニカラ
グアでも変わらなかった。

国、地域は違えど、世界中で同じ
ような生活をおくっている人々が
いる。ゴミに生活の糧を見いだす人々
である。それは、フィリピンでもネ
パールでも同じだ。共通点は「貧困」
である。そこには、バスレロ(ゴミ
捨て場)に頼ることしか、他に生活
手段を持たない人々の存在がある。
経済発展の陰で、切り捨てられてき
た人々の姿でもある。フィリピンの
有名な「スモークマウンテン」が、
地球の全く反対側、中米に存在して
いる。

恥ずべきは不公平であり、(貧困
をなくそうとする)国の政策、ある
いは国際的な取り組みの失敗は許さ
れない―今年度の国連開発計画の
報告書はそう言い切る。貧困は確実
に減っている。だが、発展途国人口
のおよそ三分の一―三億もの人
々が、世界銀行の「貧困ライン」の
基準、一日の生活費一ドル以下で生
活をおくっている。

報告書によると、人々を貧困か

ら救い出すのに必要な資金は約八百億米ドル。いいかえれば、世界の七
大富豪の合計資産、あるいは世界の
の軍事費の一〇%（九五年度）とほ
ぼ同額である。

東西冷戦後、世界的な経済の自由
化の波は、国家間の富の偏在を増長
させた。海外資金投資は、その約九
割が北アメリカ、日本、ヨーロッパ、
中国（北京と沿岸八州）に集中して
いる。弱小貧困国とそこに住む人
びとは、経済の自由化の嵐が吹き荒
れる大海に、羅針盤も海図も持たず、
あてもなく漂流する。貧困国は、不
公平な「強者のルール」により、負
けが決定づけられている試合場に、
繰り返し登場せねばならない。強い
国はますます強くなり、弱い国はま
すます弱くなる。

「途上国にとって最重要課題は貧
困の撲滅であり、家族が次の食事を
どこで手にするかだ。飢えたことが
ない議長にはわからないことだろう
が」（温暖化防止京都会議 『朝日
新聞』一二月七日朝刊）とタンザニ
アの代表が南北間の意識のずれを訴
えたのが記憶に残る。

統計上、人々は豊かになつてき

ている。そう確信するのでもいいだろ
う。地域間の数字を比較し、だから
中米はアジアよりゆたかだ、アフリ
カは旧東欧圏よりも貧しい、と指摘
するのでもいいだろう。でも、何がが
違う。現実を生きる一人ひとり、生
コンマで計られる存在ではなく、生
身の人間なのだから。

「ここで働き初めてもう三年にな
る。仕事がないから仕方ないのさ」
そう話す少年の顔は油と泥まみれ
だった。黒く汚れた彼の手には、ゴ
ミの中から見つけたマンゴーがしつ
かりと握られている。かじりかけの
果肉の白さが不気味に映える。

ニカラグアの首都、マナグア湖
畔の敷地には、見渡す限りゴミの平
原が広がる。腐乱した牛の死体、山
羊らしき小動物の頭蓋骨。頭がつぶ
れた鶏の死骸には羽がべとりとへば
りついている。生ゴミには大量の衣
服の端切れがからみついている。子
どもたちはそんな中を素足で走り回
っている。大地全体が自然発火し、
白い煙があたり一面に立ちこめる。
一日の仕事は、ゴミ収集車が現れ
る午前九時過ぎから始まる。厳しく

照りつける太陽の下、ただゴミを掘
り返す単純作業が続く。時には、分
刻みでやってくる収集車の後を、大
人も子供も、「よいゴミ」を求めて
ひたすら追い続ける。人々は手に持
つ、あるいは肩にかつぐずたを一杯
にすることだけに精力を注ぐ。疲れ
ると、ゴミの中に腰を下ろして休憩
する。影が背丈の二倍にまで伸びる
夕暮れ近くになると、沈みゆく太陽
がオレンジ色に輝き、美しい光景を
作り出す。白煙と夕陽に浮き出る人
のシルエツト。悲惨なはずなのにの
に、どうしてこんなに美しいんだ。

昨日、中央市場でかつばらいの
男が売場の親爺に袋叩きにされ、顔
を血だらけにしていたことを思い出
した。泥棒や強盗もする事もなく、
日々の暮らしを精いっぱい生きてい
る目の前の人々。その数、この場所
だけで、二〇〇〇人あまり。

柄の長い手鉤を持った小さな女の
子が、ニメートルはあるうゴミ山の
てっぺんをはいずり回っている。つ
ぶれた紙パックジュースの中に何か
見つけたようだ。雨季特有の、どん
よりとたれ込めた雲を仰ぎ見るよう

に、のどを精いっぱい伸ばし、紙パツクに残ったジューズの最後の一滴まで飲み干そうとする。グアテマラのバスレロで見た風景だ。

頭にガツンとにぶい衝撃を感じた。手を当ててみると血がにじんでいる。石か何かぶつけられたらしい。目の前で始まった若者同士の喧嘩を夢中で撮影しているときに起こった。レンズ交換をする余裕がなく、とっ組み合いをしている二人に広角レンズで、できるだけ近づいていた。周りにいる者たちはやし立て、二人めがけて手あたり次第にゴミを投げつけていた。そのうちの誰かが意図的に私にモノを投げつけたようだ。ふっ、と今までにない危険を突然感じた。

バスレロ通いを数日間続け、気の緩みがでてきていたようだ。ゴミの山を掘り返している数百人の人々の間に交じって、カメラを首から二台さげて動き回る私は、確かに異質な存在なのだ。エルサルバドルでは、一〇代初めの男の子ホルヘが、私の案内役だった。自分から話しかけるわけでもなく、どこへ行くにもいつ

もまとわりついてきた。必死にゴミをかき分けている人を撮そうとカメラを構えると、フラインダーの片隅に彼がよく入っていた。こちらから話しかけるまでは何も言わず、いつもにこにこしていた彼の姿。バスレロは、ゴミ山を平らにならすブルドーザーや大型の収集車が何台も走り回る危険なところだ。ゴミを下ろしていたトラックが急にバックしてきたりする。膝までゴミで埋まり、苦勞しながら前へ進んでいくと、突然横からブルドーザーがうなり声をあげながら現れる。転倒してゴミまみれになることは何度もあった。ホルヘは時々、そっちのほうは危ないぞと手で合図をおくってくれる。

ゴミ収集車が来ると、ここで働くおよそ五〇〇人の半数以上の人が、その車めがけて駆け出してゆく。パツクする収集車の後部ハッチのすぐ前に三〇人くらいの人々が張り付き、ゴミが落ちてくるのを手鉤を握りしめ待っている。子どもたちは、大人たちの立つ隙間に割り込み、前へ出ようとす。油断すると、頭の上から数トンのゴミが落ちてくる。二カラグアやグアテマラでも見た光

景だった。

下町のゲストハウスに戻る。水シャワーを浴び、ベッドにごろんと横になる。部屋いっぱい広がる、すえた生ゴミの腐敗臭が鼻につく。ぶんぶんとうなり声をあげる扇風機の風を火照りが続く体に受けながら、いま見てきたことを思い出し、みる。しかし、熱くなりすぎた頭では、冷静に考えことに集中できず、時間だけが過ぎていく。

△写真キャプション▽

・二カラグア、エルサルバドル、グアテマラ